

仏教用語の現代基準訳語集および
定義的用例集（パウツダコーシャ）の構築
The Creation of Bauddhakoša:
A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences

齊藤 明 (SAITO AKIRA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授



研究の概要

主要な仏教用語を、定義的な用例にもとづいて、基準となる現代語（日本語と英語）訳を提示するプロジェクト。パウツダコーシャと呼ばれる本研究は、用例集と基準訳語集を一体のものとして構築し、主要な術語を基礎とする仏教思想のより適確な理解を促すことを目的とする。

研究分野： 印度哲学・仏教学

科研費の分科・細目： 分科：哲学、細目：中国哲学・印度哲学・仏教学

キーワード： 印度哲学・思想、仏教学・仏教史全般

1. 研究開始当初の背景

仏典の伝統的な漢訳語には「空」や「意識」などのように、かなりの射た訳語がある反面、「集」「色」「捨」や「世俗」や「戲論」などのように、すでに原意の理解が困難になっている術語も少なくありません。

このような事態を克服するため、本プロジェクトは、学界の衆知を集めながら、**仏教の思想的な理解をより適切で、信頼度の高いものにした**という発想から生まれました。

2. 研究の目的

本研究は、**主要な用例**を示しながら、それを根拠として基礎的な仏教用語に関する**現代基準訳語集**の構築をめざしています。多くの仏教用語のもつ意味を、それぞれの原典に立ち返って再検証し、今の時代にふさわしい**現代語訳（日本語と英語）**を提起するプロジェクトです。

3. 研究の方法

本研究では、各分野を代表する研究分担者が連携研究者と研究協力者の協力のもとに、それぞれの研究分担課題に応じて研究班を組織して研究を進めます。

入力データは**XML（拡張可能なマーク付け言語）**を用いて蓄積・整理し、Web サイトと紙媒体でその成果を逐次公開しています。

4. これまでの成果

本パウツダコーシャ・プロジェクトは、これまでに**3つの大きな成果**を公にしました。

その第1は、関連する先行プロジェクトの成果として公刊した『**俱舎論を中心とした五位七十五法の定義的用例集**』です。

五位七十五法とは北伝仏教の最大部派であった説一切有部による一切法（物質的・精神的要素）の体系をさします。この成果ではまず、七十五に分類される個々の法の意味を、『俱舎論』が与える定義的な説明の原文とその和訳を提示することにより明確にしました。その定義的な用例に関しては、伝統的な漢訳とチベット語訳、注釈書等にも関連説明、さらには『俱舎論』の近代欧米語訳もあわせて提示しています。

この成果は2011年にWebサイト：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.htmlとともに冊子体のかたちで公にしています。

その後、本研究では、上記の成果を方法論上のモデルとして、大乘仏教系の学派として知られる瑜伽行唯識派の「五位百法」と、南方上座部における五位七十五対応法を対象にして研究をすすめて、いずれもこの3月に成果をもたらしました。

前者の瑜伽行唯識派の「五位百法」については齋藤研究班（東京大学）が中心になって進め、『アビダルマ集論』と『五蘊論』の両作品を基礎に、『**瑜伽行派の五位百法—仏教**

用語の現代基準訳語集および定義的用例集』(パウッタコーシャ II)と題して、冊子体とともに Web サイト上での公開を果たしました。これが第 2 の成果です。

これにつづき、この 3 月にまた、榎本研究班(大阪大学)が、3 年間の研究成果をとりまとめ、『**ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語**』(パウッタコーシャ III)と題して刊行する運びとなりました。これが第 3 の研究成果です。

以上のように、本パウッタコーシャ・プロジェクトは関連する 3 つの成果を公にしていたりしました。

仏教における法(物質的・精神的要素)の体系といえば、従来の研究では、北伝仏教の主要な部派であった説一切有部の「五位七十五法」の体系を、『俱舍論』を中心に学ぶのが通例でした。仏教の基礎的な教理を学ぶうえで果たした『俱舍論』の影響の大きさをみれば、このようなアプローチに重要な意味があるのは疑いありません。

しかしながら、わが国の南都(奈良)における俱舍学が、興福寺を中心に学ばれた法相学に付随して伝来したことからも分かるように、法相学のルーツにあたる**瑜伽行唯識派による「五位百法」と説一切有部の「五位七十五法」との比較考察**はきわめて重要な意味をもっています。

とくに「五位百法」説は、大乘仏教の主要学派である瑜伽行唯識派の法理解と一切法の体系を示す学説として重要です。その意味でも、今回の成果により説一切有部と瑜伽行唯識派による法の体系を比較考察する格好の糸口が得られたことの意義は大きいと思います。

これとともに、第 3 の成果によって、**説一切有部とその本家筋ともいえる南方上座部による法(物質的・精神的要素)の解釈との本格的な比較考察**もまた可能になりました。仏教思想をひろい視野から見直すことが期待されるいま、この第 3 の成果の意義もまた大きいと考えています。

5. 今後の計画

これまでの 3 年間は、論書を中心として仏教の主要な術語の意味を、定義的な用例をもとに検証し、その成果を随時公開してきました。残された 2 年間では、これまでの成果の補訂と英語バージョンを作成するとともに、各研究班を中心に、初期仏教(とくに戒律関連用語)、大乘経典、瑜伽行唯識思想、中観思想、仏教論理学・認識論、およびインド密教に関する主要な術語に対して上記の方法を柔軟に適用し、着実に研究を進めたいと考えています。

6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

齊藤明他『**瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集**』(パウッタコーシャ II) 山喜房佛書林, 2014.

榎本文雄他『**ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集**』(パウッタコーシャ III) 山喜房佛書林, 2014.

パウッタコーシャ・プロジェクトチーム(高橋晃一他 5 名)「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」『**仏教文化研究論集**』17, pp. 1-62, 2014.

Akira Saito, "A Shape in the Mist: On the Text of Two Undetermined *Sātra* Citations in the *Prasannapadā*", *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 20, pp. 17-26, 2013.

齊藤 明: 中村元東方学術賞(東方研究会・インド大使館) 2011 年 10 月.

ホームページ等

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/sta-rt_index.html